



田端英雄

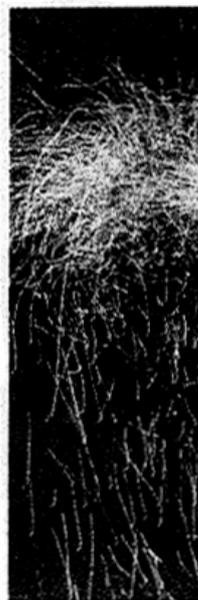
里山林を荒廃から救うには

来年、名古屋で開催される「生物多様性条約」の第10回締約国会議(COP10)を前に、里山や生物多様性に関する話題も多くなってきた。議論の資料を提供する意味で、里山と生物多様性の保全について岐阜県大垣市上石津町で行っている私たちの取り組みの一端を紹介したい。

まず、里山の定義について述べておこう。里山とは、田んぼや畦、田んぼに隣接する林との間にある草生などの農業的自然と、薪炭林、低木を束ねた粗朶を生産する粗朶山、マツタケ山などの林業的自然がセットになった自然である。この林業的自然を「里山林」と呼ぶ

でいる。

60年代後半から70年代前半にかけて薪炭が市場を失い、里山林は管理放棄された。伐られなくなって緑は回復したのに生物の種数や個体数は減って荒廃し、生態系が健全でなくなった。つまり、伐採されないため、違った時期に伐られた林がモザイク状に分布する里山林特有の構造が消え、どこ



油ストーブ1台の平均エネルギー消費量は、ペレット換算で年1・1トなので、バイオマス量が1ト当たり約130トある35年生の里山林が35トあれば、毎年1ト伐ること、100戸程

伐り続けることによって姿を消した種や絶滅に瀕している種が回復するのか。生態学の論理としては可能でも確信はなかった。そこで04年から10カ年計画で毎年小面積の里山林を皆伐し

伐って利用、多様性も回復

も似た林になってしまったのだ。その結果、生物の「すみ場所」の多様性が失われ、多様な生物がすめなくなつた。だから、里山林を荒廃から救うには伐り続ける必要がある。

そこで私たちは、伐つた里山林の材(バイオマス)で木質ペレットを生産することを提案している。調査地(上石津町)の一般家庭の灯

度の集落に持続的にペレットを供給できる計算になる。この林は伐って放置しておけば、35年後にはまた伐れるので、里山のバイオマスはまさに再生利用可能な資源なのだ。今、調査地で小さなペレット生産実証プラントを試験中である。こういった施設が実用化されれば里山林における林業の一形態になるだろう。

て、林の更新過程を調べ始めた。同時に周辺の林内の常緑樹を除去した。林床植物は元気になり、いろいろな植物の実生が現れた。伐

って4年目には今まで見られなかったササユリも点々と咲いてきた。

ハンノキ林になっていた草生でも、住民参加による「かみいし」里山大学で03年から2回刈り続けてきた。里山の反応は早かった。次の年にはカキランが花を咲かせ、広がり続けている。センブリもリンドウも増え、絶滅危惧種のウツクモドキも数を増やした。

伐って利用すれば、里山の生物多様性が回復し、里山が保全されることを、私たちの取り組みは示している。里山再生に向けた新しい林業のモデルケースとしても注目に値するのではないだろうか。

たばた・ひでお 1936年東京都生まれ。京大大学院理学研究科博士課程中退。京大理学部助教授、生態学研究センター助教授、岐阜県立森林文化アカデミー特任教授を経て現在、同非常勤講師。専門は植物生態学、古生態学。著書に「里山の自然」など。